

粕谷和夫の観察日記。アゲハチョウ（ナミアゲハ）の集団給水です。9月5日浅川の河原。ミネラルを補給しているのではないかと思います。右から2番目のチョウは翅を閉じて平面を見せない角度をとっているの、あまり目立たないです。これは忍者並みの姿消しですね。このチョウの幼虫がレモンの葉を丸坊主にします。

紅葉台



新聞

第152号

2024年
10月19日

発行人：関谷 孝

牛のこえ 高田千鶴写真展

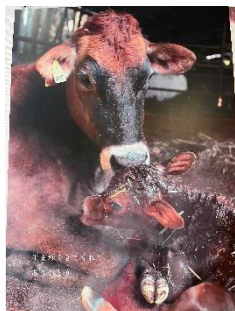


9月8日南大沢文化会館で「牛のこえ」写真展がありました。かねてより「タウンニュース」で知っていましたが、高田さんの並々ならぬ「牛愛」に興味を持ちました。

八王子市下柚木在住の高田さんは、珍しい「牛」の写真撮って30年。その節目の写真展は「牛と向き合う時、牛たちは表情豊かに話しかけてくる」と話していました。

会場には、正面に大きな牛の写真がありました。その前で高田さんにお話を伺いました。

牛との出会いは、大阪府泉大津市で生まれ、その後、大阪府立農芸高等学校で3年間牛の世話をしたことからです。酪農の仕事は朝早くから始まり、体力を使います。そんな中で出会った、子牛「りく」との交流と別れ。涙で心が張り裂けそうだった。その後、忘れられない肉牛「なずな丸」。出荷の日、「トラックが今まさに出発しようとしている…なずな丸は、今まで聞いたこともないような大きくて不安げな声で鳴いていました・・・なずな丸の頬をそととなでると少し落ち着いた様子でこちらを見つめます。その瞬間、私は涙が溢れて止まらなくなりました。トラックが動き出し、再び大きな叫び声を上げながら去っていくなずな丸を見送るのは胸が張り裂ける思いでした。そのままなずな丸は屠畜場に向かい命を絶たれます。その経験は、のちに大切に育てた命を「食べる」ことの大切さを思うようになりました。そして、牛が生きてきた証拠を写真に撮って私たちも生きていくことを感じてほしいと思いました。しかし酪農の仕事は自分の体を酷使します。体を壊し、酪農の仕事は断念しました。その後、写真の勉強をして牛の写真家になりました。



牛写真家として写真集を出版しました。写真を撮るために牧場に何うと、酪農家の皆さんの牛に対する愛情の深さや思いに心打たれます。牛は経済動物なので天寿を全うすることはできません。それでも農家の皆さんの強い覚悟と深い愛情がなければ家畜の世話はできないと実感します。

今では、「酪農教育ファーム」として学校の教育に取り入れています。「命の教育」として地域の子供たちに酪農体験や小学校に牛を連れていき、搾乳やふれあいの体験を通して「食や農、



命の大切さ」を伝えています。

その中でも八王子市にある磯沼牧場とは深いつながりがあります。2代目である磯沼正徳さんは、「牛と人の幸せな牧場」を目指し活動をしています。牛が自由に動ける飼育。牛が自ら搾乳場へ入る方式の導入等、家畜福祉を大切に方向へ変化してきました。『世界一小さなヨーグルト工場』の研究もしています。また、最近オープンコミュニティファームとして牧場を開放しています。「牛の一生に付き合う大変さと喜び」を子供たちに経験させたいと、カウボーイ・カウガールスクールの活動を30年余り続けています。高田さんの子ども達も参加しているそうです。



牛の写真からは、高田さんの経験からたくさんの思いが伝わってきました。お話を聞いてますます高田さんの人柄や生き物への深い愛情を感じました。これからの活動が楽しみです。

(右写真は、高田さんが好きな子牛)
注：高田千鶴著「牛がおしえてくれたこと」牛のまなざしを追い続ける珠玉のフォトエッセイから一部抜粋しました。



粕谷和夫の観察日記



キジの幼鳥です。多分今年の春生まれ。9月7日八王子市の理科系小学生が学ぶ水辺の環境教室で南浅川の右岸、北浅川合流付近で野鳥観察をしていると、キジの幼鳥が公園の片隅に現れ、ムクドリと一緒に地上で餌を探っていました。親離れして自ら餌を探しているものと思われる。



9月8日八王子市湯殿川で野鳥定期カウント中にカワセミ、アオサギが魚を飲み込むシーンが観察でき、ハクセキレイがシオカラトンボを食べているシーンも観察できました。この写真は**カワセミとハクセキレイ**です。

アオサギが魚を捕ったシーンです。写真左の**アオサギ**の脚元の水しぶきに注目してください。アオサギは多めの水量と水流の所で魚をしています。付近にはギンヤンマの飛翔、胴体に青色が光に当たって綺麗でした。アレチヌスビトハギの小群落の花と実が目立ちました。



紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」のHPに公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。